

孤燈獨語錄

獨語子

▲親がなくとも子は育つ』といふ。然し、之は身體丈けについて、いつた事である。精神まで圓滿に育て様といふには、何れ親がなくつては出来な話し。里子にやられた子の意地の大低は宜しくないのを見ても、早くから、両親に離れた子の成長の後、殊に其感情に物足らぬ所のあるに見てもよく分ることである。否な両親の何れかを失つて何れか一方丈けで育てられた子供でも、大低の場合に於ては、其品性に缺けた所が出来るのは是非もない次第といはねばならぬ。母の慈愛と父の威厳とは、二つ相待つて子供の圓滿な品性を作るのである。

▲母となり父となつて、始めて起る感覺は、母と

して父としての義務責任の感であらう。この責任の感の愈々深い人はど、いよく善良な父であり母であるのであるある人か子供を持つて暫らくの後『あゝ子を持つて知る親の義務』といった。親の恩といふのは子の方からいふ言葉で、親からいふ時は、こゝろいふのが至當であらふ。

▲家庭の趣味といふ語は近來の流行語であるが、趣味とは果して何を意味するかと問ふたら、多くの人は如何答へるであらう。たい快樂、たい幸福、たい慰安などいふ丈けの意味では所謂家庭生活の眞趣味を得たものとはいはれまい。之等の意味の外に須らく修養の意味を加へなければならぬ。夫としての修養、妻としての修養、父として、母として、子として、兄弟としての修養訓練を受くべき場所として始めて家庭生活の眞趣味を得たりと

すべきである。『善良の夫たるものは、又善良の男子』といふ語は移して、妻にも父にも母にも子にも兄弟にも用ふることが出来るとすれば、家庭は實に人間を完成する場所である、こゝにいふ風に見て、始めて家庭生活の真趣味が知れよう。家庭の趣味といふことを、たい愉快などと解釋し去るのは、まことに以て淺見である。趣味といふものはそんな淺薄な情緒ではない、向上的傾向を有する極めて、高尚な情操である。

▲今頃男女同權など振り回すものもあるまいが男女同權といふことが、社會の實際に適當しない議論とすれば、家庭で夫婦同權といふことも亦間違つて居る。一國に二人の君主あつて其國が治まるものでないと同じ様に、一家に權利を同じくする二人の家長があつて其家庭が治まるであらうか。

一體同權といふのは、神とか自然とかいふものに對しての場合にいふ言葉で、生存競争の人間社會に於ての問題でないものである。何れこんなハイカラ思想は、西洋人の思想の糟粕を嘗めてから起つたことと思ふが、西洋の道德の原據としての聖書に於て、妻が夫と同じ權利を持つべしといふ訓は何處にもないのである。こゝにいふ理想を持つて妻を持たうものなら、夫こそ、其夫は、一生の盤枷をはめられた様なものといつてよい。

▲近來、家庭雜誌のふえるのは夥しい、曰く家庭の友、曰く家庭、曰く家庭雜誌、曰く新家庭、曰く日本の家庭、曰く明治の家庭、其地方に發行せられるものにも曰く家庭新聞、曰く家庭、その他直接に『家庭』と名が付かぬまでも、大抵の婦人雜誌は、皆多くは家庭を目的として居るものであ

つて見れば、此種の雑誌は、二十の上も數へるこ
とが出来よう。それは、これから家庭に讀書の嗜
好をもつ主婦が出来るに従つて増したので、先づ
は家庭の一進歩と見て宜しからうが、然し、雑誌
だから、書物だからといつて、其書く所いふ所が
皆穩當な説許りとはいはれぬ、故に讀むのはよい
が、夫と同時に、雑誌に讀まれぬ用心をして、讀
んだものを精細に批評する力を得て置ねばならぬ

保育者のため

幼稚園に於ける自然研究(三)

平山 ひさ

○フレール氏は凡ての著書の中に、動物を幼児
の友とする様にと望んで居る。幼児は動物を世話
する事に由て、動物は何を要求するか、どんな感

情を有つて居るかを知り、又自身動物に對する感
情が養成され、之が延ひて人間の生活に對する養
ひや注意を知る事になる。即ち植物に對する注意
が動物に對する注意に進み、遂に人間にまで及ぶ
ものである。

○幼児を動物と親ませるには田舎がよろしい。其
處には蝶も飛び牛も遊び雀も巢を作つて居る。併
しそれ故にあらゆる幼稚園を畑の中に待つて行く
といふ事もできぬ。さればと言つて折角野原や畑
に居る動物を、彼等にとつては不便な爲にならぬ
町中に連れて來るがよいとも言はれぬ。けれども
何處でも何人でも犬や猫を飼養する位はできそう
なもので、之等を正しく愛し親切に養ふ良習慣を
與へるのは至極結構な事である。又少し注意しな
へすれば雞とか兎とかをも飼ふ事もできそうな